

福大Cプロジェクト （福大までいプロジェクト）



<目次>

はじめに

1 福大Cプロジェクトの活動紹介

1.1 本事業への応募動機

1.2 調査地の選定理由

2 飯舘村と佐須地区の紹介

2.1 飯舘村の紹介

2.2 佐須地区の地域づくり

2.3 佐須地区「までいな休日」の取り組み（佐須コース）

3 福島大学Cプロジェクトの活動記録

3.1 活動経歴

3.2 合宿調査の報告

聞き取り対象者：福島県飯舘村役場 総務課企画係 主査 三瓶 真さん

聞き取り対象者：管野永徳さん

3.3 現地踏査 - あるもの探し -

4 まちなかマルシェへの参加とその活動記録

4.1 調査結果の分析

4.2 まちなかマルシェの概説

4.3 佐須地区とのまちなかマルシェ出店に向けた話し合い

4.4 出展の準備－佐須地区住民の方との野菜の運搬と芋煮の準備－

4.5 学生の出展での取り組みの工夫と現場での学び

4.6 成果と課題

5 までいな休日 in 佐須

5.1 佐須地区のまでいな休日の様子と魅力

5.2 まちなかマルシェの報告の場としてのまでいな休日

6 総括－活動を通して－

まとめ

はじめに

私たち福大Cプロジェクト（以下、Cプロジェクト、当プロジェクト）は、農村が抱える集落活性化という喫緊の課題に対して実践的な活動をしたいという有志で立ち上げた集団である。ここでいう実践的とは、授業や専門書から学んだ地域・集落活性化という課題を集落という実際の現場で考え、課題を見つけ、解決に向けたとりくみに挑戦するという意味である。また、活動の方針として学生の主体性を重視し、教員の助言・協力等は得ながらも活動に関する意思決定はできる限り学生自身で行うことを掲げた。

こうした目的・方針の下、私たちCプロジェクトは農村の集落活性化に大学生が貢献できることは何かということを考え続けてきた。地域経済を立て直す、あるいは少子高齢化を喰い止める等の喫緊の課題への解決方法を提案する。そのようなことをおよそ1年の期間で、しかも大学生が成し遂げることは困難だろう。それどころか、Cプロジェクトが実際に行なった飯舘村佐須地区（以下、佐須地区）での調査は、地域への貢献という側面よりも、やはり学生の実地学習の場だったという方が正しい。

それでも、私たちは佐須地区での現地調査やメンバーミーティングを繰り返すなかで、学生に何ができるのかを考え続けた。そして私たちなりにその答えを見出すことができたと感じている。その際、キーワードとなったのが「地域と交流する」である。ここでは、そのキーワードについて述べるのみにして、答えは本章に譲りたい。

「地域と交流する」とは調査に臨む際の態度のことである。研究者とは異なり、専門的な知識も豊富ではない大学生が地域を調査するためにはどのような工夫が必要だろうか。私たちプロジェクトはそれを「地域と交流する」という点に求めた。地域の方々との何気ない会話ややりとりの中から少しずつ地域との信頼を築いていくこと。学生自らが主体的に調査を重ねるにしたがい、こうしたとりくみの中でこそ地域の現状や課題が理解できるのではないかと考えるようになった。このキーワードを軸に、私たちプロジェクトは集落活性化、あるいは地域づくりに関する活動にとりくんできた。

そして、その具体的な活動については、「都市と農村の交流」に着目し、佐須地区の皆様と意見交換しながら「まちなかマルシェ（以下、マルシェ）」というイベントへ参加するというものになった。「都市と農村の交流」は過疎化や農業の衰退という中山間地域の課題を解決するための一つの方法として近年注目されている。当プロジェクトはこれまでの「都市と農村の交流」のとりくみの場の多くが農村であったことから、その交流の場を都市で行うという計画を立てた。その利点は、より多くの都市部の住民に農村の文化・生活を周知できることである。もう一つの利点は、農村部の住民側にも都市の文化・生活というものを、身を持って体験してもらうことである。こうしたかたちの「都市と農村の交流」が地域活性化や地域づくりの支援となりえるのではないかと考えた。

そして、このアイディアは佐須地区の方々と「まちなかマルシェ」へ参加するというかたちで実現した。当イベントは福島県の県北の中産間地域の物産展に似たイベントである。イベント後は、佐須地区の年に一度の地域イベント「までいな休日」に実行委員として参

加させていただいたり、地域の催し事の手伝いをしたりするなどの関係を築きながら、この報告書をまとめる時期を迎えた。今回の報告書はそれら一連の成果をまとめたものである。以下、各章を概括して当章の結びとしたい。

第一章では当プロジェクトの活動目的と一年間の活動内容をまとめた。具体的には、当プロジェクト設立について、当事業の応募動機について、そして佐須地区を調査対象に選定した理由について書かれている。そこでは、当プロジェクトが考える佐須地区の課題解決へ向けて「都市と農村の交流」を都市で実施するという当プロジェクトの狙いを示した。

第二章では一泊二日の佐須地区での調査合宿の活動についてまとめた。当事業の重要な調査として位置づけられるこの合宿は、当プロジェクトのその後の活動の方向性を定める重要な機会となった。大学生の視点から集落の魅力を発見する現地踏査はもちろんのこと、集落の方や飯舘村役場の方への聞き取り調査や、今年で2年目を迎える都市と農村の交流イベント「までいな休日」の実行委員会に出席するなどの活動を行なった。

第三章では当プロジェクトの活動の集大成ともいえるマルシェへの参加の記録をまとめた。当イベントはCプロジェクトの活動目的である「都市と農村の交流」の機会の創出として位置づけている。マルシェのイベント主旨の説明とともに、佐須地区の協力を得てそれへ参加した動機とその過程について述べたあと、イベント当日の活動をまとめた。また、上述した「までいな休日」における当プロジェクトの活動についてもまとめた。そこでは、マルシェの活動の成果を佐須地区へ報告するといった活動も同時に行なった。

第四章では、これら一連の活動を振り返りながら、活動の成果と課題についてまとめた。当プロジェクトが考えた佐須地区の課題に対して「都市と農村の交流」を都市で実施するという試みがどのような効果をもたらしえるのかについて考察を行った。そして最後に、今回の経験から大学生が地域づくりの支援にとりくむあり方についても提言した。

以上のように、当報告書は飯舘村佐須地区を調査対象に大学生の集落活性化・地域づくりの支援の可能性と展望、課題についてまとめたものである。

1 福島大学 C プロジェクトの活動紹介

本章では、福島大学 C プロジェクトの活動目的や応募動機、調査対象地域の選定理由、1 年間の大まかな活動内容について紹介する。

1.1 本事業への応募動機

ここでは、私たちが、福島大学 C プロジェクトをどのような目的で活動しようと立ち上げ、「大学生による集落活性化事業」に応募するに至ったのか、その動機について述べていきたい。

C プロジェクトとは、「キャンパス (campus)」と「チャレンジ (challenge)」の頭文字を取って名づけたものである。これは、学生が地域との交流をさらに深め、より活動的で実践的な地域づくりへの寄与を目指すことを意味している。私たちは、これまでに地域活性化や地域づくりの施策について学んできた。私たちだけでなく福島大学には、地元を元気にしたい、賑わいのある街を取り戻したい、と思い進学する学生も多い。しかしながら、これまでの大学での学びを振り返ると、学内（講義、文化祭等）での共同作業やレポート報告に留まったものが多かったのではないかと考えるようになった。ゼミ演習など地域に赴き実態調査をすることもあったが、もっと実践的な地域づくりに関わりたいという思いでこのプロジェクトを立ち上げた。

私たちは、都市と農村間の交流が希薄になっているのではないかという疑問から考え始めた。現在「地産地消」「安全安心」食べ物に大きな関心が集まっており、またそれを地域づくりにも活かす動きがみられるが、都心では、そういった「食」に対する関心がありつつも、コンビニ弁当やファストフードに手を伸ばしてしまう現状が見られている。つまりそれは「地産地消」「安心安全」の言葉は全国的に広まりながらも、その言葉に込めた農家の方々の想いは伝えられていない、伝わりにくいといえるのかもしれない。「地産地消」「安心安全」は顔が見えるのではなく、文字が見えているだけともいえるのではないのだろうか。ここから本当の想いを届けるためには言葉だけでなく、“face to face” 本当の顔が見える場を都市部に積極的に作り出す必要があるのではないかと考えた。このようなことから、生活や地域づくりなどを身近な「食」から捉えながら、そのことを通して都市と農村の間の交流を促進、活性化させたいという方向性が打ち出された。さらに都市や農村地域との話し合いを重ねながら、都市と農村の交流を活発化させることができるような取り組みを検討していくことになった。

1.2 調査地の選定理由

今回、福島大学 C プロジェクトは、調査の対象地域として福島県飯舘村にある佐須地区を選定した。ここでは、なぜこの地域を調査対象としたのか、その選定理由について述べていく。

(1)飯舘村を調査地に選んだ理由

まず、なぜ飯舘村を調査対象にしたのかについて述べる。その最大の理由は、飯舘村での村づくり、地域づくりにある。飯舘村は、「までい」というフレーズを軸に、村長、役場職員、村民が一緒になって村づくり、地域づくりを行ってきた。「までい」とは、「まごころを込めて、大切に、じっくりと」などの意味を指す方言である。それは村の総合振興計画策定にも表れており、『飯舘村第5次総合振興計画書「大いなる田舎 までいライフ・いたて」』（平成16年6月策定）には、以下のような記述がある。

「私たちは「手間ひまを惜しまず」「丁寧に」「時間をかけて」「じっくりと」「つつましく」暮らす、飯舘流スローライフを“までいライフ（MADAYLIFE）”と呼ぶことにします。

これは、私たちのふるさと飯舘村が本来持っている歴史や風土を今一度見直し、人間本来の楽しい「暮らしぶり」や「生きざま」をつくりあげようという、飯舘流スローライフの提案です。（「基本構想 第1章・村づくりの基本理念」より抜粋）

この計画は、村の姿、地域の暮らしを真摯に捉えるところから始まり、ああでもないこうでもない「までい」に時間をかけ議論を重ね、行動にしてきた。模索しながら少しずつ前に歩み続ける姿勢を保ち、自分たちの生活をとらえ、無理をせず新たな挑戦を試みる飯舘村と村民の姿に、私たち学生が「地域づくり」とは「活性化」とは「協働」とは、さらには「私たちの生活」とは何か見つめ直し、学ぶことができると考えた。

(2)佐須地区を調査地に選んだ理由

次に、飯舘村の中でも、なぜ「佐須地区」という場所を選んだのかについて述べる。

佐須地区は、高齢化率30%を超え、高齢化・過疎化が進んでいる。また、そのことにより、地域の活力低下や農業の衰退が問題となっている。佐須地区では、このような地域の課題に地区の住民が自ら向き合っている。例えば、地元創出の創作太鼓である「虎捕太鼓」の活動がある。また、「こだわりの里」というテーマで、地域資源である農作物や、それを加工した特産品、郷土料理を使って、地域の活性化を図ろうと活動してきた。

さらに平成21年からは、佐須地区で年に1回開かれている一大イベントである「農業祭」と並行して、「までいな休日」が開催されている。「までいな休日」は、「地域を元気にしたい」「地区のみんなが楽しむ、都市の人々も一緒に楽しむ」という思いのもと、地区住民が事業を企画・実施し、都市に住む人々を佐須地区に呼び、「農業祭」をはじめ様々なイベントを体験してもらうことで都市と農村の交流を図るものである。

当プロジェクトでは、このように地域の課題に対して積極的に取り組む佐須地区から、座学ではなく実践的に地域づくりを学べるのではないかと考えた。そして、佐須地区のPRに貢献し、農作物・田舎料理・自然景観・伝統文化など、佐須地区の魅力を探索、活用し

ていきたいと考えた。

平成 21 年の「までいな休日」では、参加者の興味を最も引いたものが村のおばあちゃん達が作った田舎料理であった。一方で、田舎料理など農村の良さを都市に知ってもらうためには、これまでのように都市から人が来るのを待っているだけではなく、農村の人々自らが都市に農村の生活を伝えることも必要でないかという地区住民の声もあった。また、住民からの反省点、課題点として、「参加者の増加と内容の拡大」や、「交流の継続性（やめるとすぐに廃れてしまう）」、「交流からの農産物・加工品の販売拡大」といったものが挙げられた。さらに、佐須地区の農家の人たちのなかに、自分たちの目で都市の人たちの反応（地産地消、田舎の生活等）を見てみたいという思いが見え始めていた。

そこで、都市住民が農村へ行って交流する「までいな休日」に対して、学生である私たちが、農村住民が都市へ赴き交流する機会を作るという提案をしていこうと考えた。具体的には、「食」への関心が高まる都市部で、「安全安心」「低農薬・無農薬」「手づくり」「無添加」である特徴を持つ佐須の農産物を PR し、地区の農作物・加工品の販売を通じて、「都市」で都市住民の反応に触れる機会の創出を図り、本来機能していた農村と周辺都市の生活循環を意識することで、現在の地域活性化に必要と思われる近郊圏内の相互の協力関係を考察してみたいと考えた。さらに、「都市と農村の交流の機会」を学生が作ることで、佐須地区の農作物・加工品、「までいな休日」、「までいライフ」を都市部である福島市に広く PR したいと考えた。

このようなことを踏まえ、最終的には、飯舘村の地域資源である農作物を活かし、農家レストランのようなものを都市部である福島市内に出店するという構想を立て、それによって都市と農村の結びつきをより深くしていくことが出来るのではないかと考えた。

以上が、飯舘村佐須地区を調査対象地域に選定した理由である。

2 飯舘村と佐須地区の紹介

これまでの私たちの活動目的や活動経緯、調査対象選定理由などを説明するにあたり、飯舘村や佐須地区について触れてきた。村や地区がどのような方向性や目標を持ち活動してきたのかは、私たちが非常に重要視していることであることは明らかかと思う。煩雑になってしまっている部分もあるので、ここからは飯舘村や佐須地区の村づくりを整理していく。

2.1 飯舘村の紹介

福島県飯舘村は昭和 31 年に旧大舘村と旧飯曾村が合併して誕生し、20 もの行政区が存在している。福島県の北東、阿武隈山地北端の高原地帯に位置しており、人口 6,160 人（男 3089 人、女 3071 人）、世帯数 1,706 世帯（2010 年 9 月 1 日現在）、面積約 230 平方 km、の小さな村である。阿武隈の豊かな自然と標高 200～600m の高冷地を活かし、トマトやインゲン、レタスなどの高原野菜や、カーネーションやトルコキキョウなどの花卉栽培など

も積極的に行われている。このような地形を利用した牧畜もみられる。村では飯舘村振興公社（畜産技術センター）を設立するなど「飯舘牛」といったブランド和牛を進め、東京などの都市部に向けて出荷を行なってきた。

しかし山々に囲まれた高原地の村へ訪れるには必ず険しい山道を登らなければならない。県庁所在地である福島市や相馬地方の中心都市である相馬市からは車で約40～50分の距離と遠方とまではないが、このような地理的要因からも周囲の市町村とは情報や産業など疎遠、孤立になりやすい地域であることがいえる。さらに雇用が多い都市部への就業、そして進学校などの教育という視点からも、子育て世代を中心に周辺都市に移る傾向が見られるなど、産業・雇用や過疎・高齢化が村の課題となっている。また、このような山間地特有の自然環境により、小規模な田畑が目立つことや冷害、獣害など長い間にわたり農業に大きな被害をもたらしている。

飯舘村では「までい」という「大切に・心をこめて・じっくりと」などの意味の持つ方言を用いながら、積極的な住民参加を促すまちづくりが行なわれてきた。効率化や結果が求められる現代社会のなかで、豊かに生きるとはどういうことであるかを考えた時、「までい」な暮らしをしている飯舘村はとてもすばらしい村であるという村長や村民の気づきが背景にある。ここから村のあり方、自分達の暮らしを真摯に捉え、自分達がどのような地域にしたいか、どのようなことが出来るのか、村民が考え実行できるような指針が、総合振興計画にあらわれ、住民の意思による村、地域づくりが本格化したのであった。

具体的には飯舘村にある20行政区それぞれが「地区別計画」を策定し、それに基づき、行政区ごとの地域づくりを発展させる「ちいきくらしあっぷプラン」と、行政区を越えて連携することで新たな暮らしの基盤づくりを進める「つながりプラン」がある。これまでに複数の行政区が合同で地域活性化の意見交換をするなど活動が見られ始め、地区内だけではなく小規模の連携した地域づくりが芽生えている。このような理念や政策により住民による地域づくりが飯舘村で展開されているが、私たちが一緒に活動した佐須地区においても、地区の問題や村の問題に気づき、より豊かな暮らしにむけて住民たちが取り組んでいる。

2.2 佐須地区の地域づくり

20の行政区で構成される飯舘村のなかで私たち学生が協力して活動をした地域が、佐須地区である。佐須地区の人口は255人（男122人、女133人）であり、66世帯の人々が暮らしている。佐須地区は飯舘村の北北東に位置し、当村北部を走る115号線に近く、真野川やふくしま百名山である虎捕山などのレジャースポットを有している。特に虎捕山麓にある山津見神社は、農漁業従事者が豊作と安全の祈願に毎年全国から約2万人もの参拝者が訪れている。古くから地区住民は信仰とともに、団子や蕎麦をこしらえ参道に茶屋を設けもてなしてきた歴史が今も受け継がれている。

地区が主催する一番大きなイベントであるのが、農作物の収穫を祝う「農業祭」である。

これは 2011 年で 21 年目と比較的新しいが、地区の方々にとって一番の楽しみだというお祭りである。今では生産が減ってしまったが、佐須地区ではタバコ葉と繭が盛んであった。タバコ小屋や蚕小屋を利用し、どぶろくづくりの酒蔵や茶屋を経営する農家もみられる。佐須地区は福島県において最初のどぶろく特区を取得した地域としても有名である。まさに、豊かな自然と観光資源を有する佐須地区は自然や農業、そして信仰といった文化を、他の地域との交流を盛んに育んできた地域なのだ。佐須地区では、多くの実りを生む自然の保護活用、獣害対策、地元産品である野菜や加工品の PR・販売促進などを通し豊かな地域資源を活かすための取り組みが必要とした。これらのことは佐須地区の地区別計画にも表れている。

しかしながら、全国の中山間地域や飯舘村と同様に、過疎化、少子高齢化の進行や農業収益の低迷による農業後継者問題、さらに有害鳥獣による農作物被害など山村地域特有の問題が発生している。現在、佐須地区の高齢化率は 30.98%と高く、また村内においても最北に位置する佐須地区は中心部から離れているため、村内での通勤、通学にも不便をきたしていること、インターネットなどの情報通信機器の普及が遅れていることなどの生活環境は過疎化、少子化を促しかねないような課題ともいえる。地区内の活気が少しずつ失われていると感じるなかで、皆が楽しく明るく過ごすために、佐須地区の自然と文化を活かしながら地域の課題を少しでも解消するためにはじめられたものが、都市と農村の交流をテーマとした「までいな休日」であった。

2.3 佐須地区「までいな休日」の取り組み（佐須コース）

（1）までいライフ推進事業実行委員会の設立

佐須行政区では地区住民、地区の活動団体組織によって構成される「佐須までいライフ実行委員会」（以下、佐須実行委員会）が中心となり計画づくりをしてきた。この組織は佐須行政区長である佐藤公一氏が「委員長」をはじめとし、佐須地区内の 5 つの「班長」、佐須地区の地区別計画の役員である「第 5 次総合計画長」、そして「婦人会」「食を考える会」「子ども育成会」「老人会」「消防団」「虎捕太鼓」の 6 団体によって構成されている。

（2）佐須地区の考える 2 つのコンセプト

までいライフ推進事業実行委員、いいたて・までいな村づくり応援スタッフでもある、松野光伸福島大学教授による講演会が 2009 年 8 月 21 日に設けられた。そこでは、村がかかげる「までいライフ」とは何か、佐須地域の「までいライフ」とは何か、もう一度考え直すことから始まった。そこからさらに、どのような趣旨でどのように事業を進めるのか、佐須実行委員会で 5 回話し合いの場が設けられた。

佐須実行委員会の話し合いでは佐須地区で毎年開催される「佐須農業祭」が話題となった。農産物の収穫を祝い、地域を盛り上げてきた農業祭が 20 回目を迎えることから「地区内だけではなく、消費者も交えてみては」という案があげられた。「農業祭には地区が盛り

上がるが、普段はそれほどでもない。これを機に地区みんなで楽しみ、元気が出る何かに繋がっていかないか」という意見もでたという。農業祭は、自分たちが育てた野菜や特産品を紹介し、みんなで収穫の喜びや味覚を楽しむものであり、兼業農家が多い地区住民のいわば集大成といえる。この喜びや自慢の野菜を自分たちだけで分かち合うのではなく、村の外たちの人々も交えることでさらに地域が活気付くのではないかと考え出した。また、佐須地区は、どぶろく特区や気まぐれ茶屋など農産物の加工販売に力を入れた活動が見られる地域でもある。「丹精込めて栽培した自慢の野菜や特産品をもっと多くの人に知ってもらいたい、食べてもらいたい」「安全安心な食材が全国で注目されているが、それはうちの畑で取れる自慢の野菜そのままではないか」、「都市部を中心とした村外の人々に飯舘村佐須地区で採れる、安全安心のこだわりの野菜をもっと知ってもらいたい、買ってほしい」という声から、安全安心の農産物に関心がある人、購入したい人を対象にしたプログラムづくりと繋がっていった。

このようにして、20 周年の農業祭をメインに都市部から来た人たちも含めみんなで楽しむこと、佐須のこだわりの農産品をもっと知ってもらい、買ってもらうことの2つが、佐須地区の大きなコンセプトとなった。

(3) プログラムづくり

これら 2 つのコンセプトをもとに佐須実行委員会では「こだわりの里でこだわりの時をこだわりの㊤たいめん！！」というキャッチフレーズを作成し、これにかけて 5 つの佐須地区の魅力をプログラムに取り入れることとした。この「こだわり」は第 5 次総合振興計画の地区別計画である「ちいきくらしあっぷプラン」の佐須地区の目標「佐須 こだわりの村」にも掲げられている。佐須地区の「こだわり」とは地区で取れる自慢の野菜や特産品、そして温かい地域の人柄だと佐須区長の佐藤公一氏はいう。参加者、そして消費者にいか

に満足して笑顔になってもらうかを第一にプログラム作りにあたっていた。

佐須地区の魅力や自慢はいったい何か地区で意見を出し合ってみると、うつくしま百名山の虎捕山登山をはじめ、野菜オークション、虎捕太鼓披露、どぶろくや郷土料理、きのこ採り、そば打ち体験、などの多くのアイディアが書き出されたという。それに加え、までいライフ実行委員会の報告会で得た、飯樋の実践結果や、小宮地区のプログラム案を参考にするなどした。そして実際にプログラムに取り入れた企画は、虎捕山登山、きのこ採り体験、虎採太鼓体験、そば打ち体験、農業体験、農業祭・収穫感謝祭（品評会審査体験、餅つき、記念植樹、菊観賞体験、巨大カボチャの重さあて大会、ハロウィンカボチャ作成）農産物オークションと実に盛り沢山である。これは地区の人々が参加しやすくする工夫でもある。その一つとして「達人」の導入である。各イベントにはそれぞれ「達人」と呼ばれる、この人なら間違いないと地区の人が声をあげる人が選ばれている。山の達人、きのこの達人、そば打ちの達人、太鼓の達人などが参加者に知識や技を披露した。さらに多くのイベントは都会からの参加者だけでなく、多くの地区住民が参加する機会にも繋がって

いる。

(4) 佐須実行委員会のプログラム担当と地区住民の参加

これほど多くのプログラムをこなすために、佐須実行委員会では主担当を割り振り、当日の進行と準備をすることにした。その主担当一覧が図表 2－1 である。

図表 2－1： 佐須までいライフ実行委員会、主担当一覧

委員長	司会進行、広報、協力依頼、
副委員長	司会進行、広報、協力依頼
婦人会	郷土料理メニュー作成調理、会計
食を考える会	郷土料理メニュー作成調理
子ども育成会	看板作成、ハロウィンカボチャ作成
老人会	観賞菊の育成・展示
虎捕太鼓	太鼓披露の準備、体験の準備
消防団	登山救護・移動、イベントの安全警備
地区内 5 つの班長	各班内住民への広報、協力依頼
第 5 次総合計画長	記録、写真撮影

さらにそれぞれの会員や団員に所属する地区の人々とともに、当日のスケジュールや担当など詳細を決めていった。お年寄りから子ども達まで地区全体となって「までいな休日」の開催に取り組んできたことがわかる。実際に開催当日には、子供たちから杖をついて歩くお年寄りまで、多くの住民たちが見られた。普段家にこもってしまいがちであるが、自分が担当した準備や作品の展示があるということは、少し顔を出してみようという気持ちにさせる。みんなで楽しむという地区のコンセプトが大いに現れている。地区内の全ての家庭に開催当日の参加を促す知らせを配布するなど、地道な呼びかけも行われた。

3 福島大学 C プロジェクトの活動記録

3 章から 4 章にかけては、私たちの活動の中心となった合宿調査と街なかマルシェの報告をしていく。3 章では初めに、時系列に沿って福島大学 C プロジェクトの 1 年間の大まかな活動の経緯を紹介する（表 3－1 参照）。そして、合宿調査の報告として、飯舘村役場の三瓶真さん、佐須地区住民の菅野永徳さんの聞き取り報告、現地踏査の報告に続けていく。

3.1 活動経歴

平成 22 年 4 月に当プロジェクトへの参加メンバーの募集を行なった。その結果、大学院

生3名、大学生4名、計7名で当プロジェクトが結成された。その後、同年5月から6月にかけては、飯舘村や佐須地区の地域づくりについて、資料の調査により理解を深めるとともに、活動内容の検討を行ない、「農家レストラン」の構想が出来上がっていった。

同年5月30日には、佐須地区グランドゴルフ大会に参加し、佐須地区の住民の方々と初めて顔を合わせた。同年7月9日には、第1回佐須地区までいな休日実行委員会に参加し、佐須地区の住民の方々に当プロジェクトの活動を提案し、活動の内容について話し合った。話し合いの中で出た意見を踏まえて、同年10月10日、11日に行なわれる福島市内のイベント「街なかマルシェ」に出店し、佐須地区の野菜や特産品を販売するとともに、佐須地区をPRすることにした。それに伴って、同年7月16日にはマルシェの「売り方講座」に参加し、同年7月25日には第1回街なかマルシェを視察した。

同年8月20～21日には、飯舘村内で合宿を行なった。1日目は飯舘村役場の三瓶真さん、佐須地区で農業を営んでいる管野永徳さん、佐須地区で農家レストランを経営する佐々木千栄子さんの3名に聞き取り調査を行なった。また、再び佐須地区までいな休日実行委員会に参加し、佐須地区住民との話し合いが行われた。2日目は、佐須地区の地域資源探しや、飯舘村内の直売所の様子を見て回った。

同年9月からは、「街なかマルシェ」に向けての準備を行なった。同年9月3日には街なかマルシェ出店者への説明会に参加した。その後、メンバー各自で分担して出店に向けての準備を進めた。本番前日の同年10月9日には、佐須地区へ行き、佐須地区の住民の方々に持ち寄っていただいた野菜を受け取り、当日に出す芋煮の具材を切るのを手伝ったりした。そして、無事に街なかマルシェを終えることができた。

同年11月には、前年に引き続き開催された「までいな休日」に参加し、住民の方々に当プロジェクトのこれまでの活動を報告した。同年11月19日には県民討論会、平成23年2月12日には学生企画科目発表会があり、当プロジェクトの活動について報告をおこなった。

表3-1 福島大学Cプロジェクトの活動の経緯

月	活動内容
平成22年 4月	参加メンバーの募集、プロジェクト結成
5月	飯舘村・佐須地区についての勉強・資料調査、および活動内容についての話し合い（～6月） 佐須地区グランドゴルフ大会への参加（？日）
7月	第1回佐須地区までいな休日実行委員会への参加（9日） 街なかマルシェ売り方講座への参加（？日） 第1回街なかマルシェの視察（25日）
8月	飯舘村での合宿調査：聞き取り、集落踏査、実行委員会の参加（20～21日）
9月	街なかマルシェ出店者説明会への参加（3日）

	街なかマルシェの準備（～10月）
10月	街なかマルシェの準備：佐須地区、「氣まぐれ茶屋ちえこ」にて調理実習（9日） 街なかマルシェへの出店（10、11日）
11月	までいな休日への参加、街なかマルシェの成果発表（6、7日） 県民討論会への参加（19日）
12月	活動報告書作成（～3月）
平成23年 1月	学生企画科目発表会への参加（12日）

3.2 合宿調査の報告

聞き取り対象者：福島県飯舘村役場 総務課企画係 主査 三瓶 真さん

平成22年8月20日の合宿調査（1日目）の午後に、飯舘村役場職員の方からもお話しいただいた。行政の立場からみた飯舘、佐須地区の魅力や課題を教えていただくためである。今回は総務課企画係主査の三瓶真さんから話を伺った。

（1）飯舘村と佐須地区の特性

飯舘村には、よそから入ってくる人たちを邪険にせず、互いに助け合いながら生活していく風土が息づいている印象があるようだ。人々がこの土地を開拓し、定住してきた歴史からも強い仲間意識があるからで、その中でも佐須地区は、まとまりのあるコミュニティだろうとのことだった。学生の受け入れや伝統芸能の保存に積極的であったり、『結』の考え方が残っていたりと、人々が協力し合って何かに取り組むという姿勢は過去からの積み重ねで出来ている。また、佐須地区には山・農・海を司るとされ古くから庶民の信仰を集めてきた山津見神社があるのだが、その存在も佐須の人々の団結力を高める役割を果たしてきたのではないかとのお話だった。このような理由から、飯舘村、佐須地区には村づくりを行っていくための土壌は出来上がっているように思うとのことだった。

（2）飯舘村と佐須地区が抱える課題について

では、村全体、佐須地区が抱えている問題・課題は何か。それは互いに共通していえることで、少子高齢化、農業後継者、鳥獣被害の問題である。若い人たちは農業を不安定な職として捉え、避けていく傾向がある。これは飯舘村に限ったことではないが、農業後継者問題を解決する特効薬はなく、農業の付加価値を高める取り組みを試行錯誤しながら行っているようである。これまではマーケットの開発に重きを置いてこなかったことが問題であったため、農業新規参入者や新規作物栽培に対する助成を行い、新たな市場を探していこうとする取り組みが行われている。加工所をつくって地域の雇用創出につなげたいという考えもあるようだ。また、大きなお世話志隊といういわゆる『婚活』を支援する団体が中心となって、若者の出会いの場を提供し、地域に定住する若者を増やそうとする試み

も行われている。他にも、気軽に利用できる公共交通機関が満足にないこと、道路の関係で近隣へのアクセスが不便なことなども課題として挙げられた。佐須地区は村の中心部から離れたところに位置しており、また、アクセス道路となる国道も冬場は凍結してしまう。この点に関しては、よそから飯舘村に訪れる人も不便ということであるので、地域に人が寄り付かなくなり、活気がなくなる要因となりうる。そのため、平成 22 年度 4 月からはコミュニティバスを運行することで対応した。道路の方は、住民の関心が高いことから国道 115 号線の舗装工事が行われた。地理的な問題・交通の便の悪さは、情報環境の整備にも影響する。過去に各行政区でホームページを制作しようという動きは見られたが、完成することはなかった。そのためもあって行政区ごとの観光 PR などが充分に行われてこなかった。しかし、平成 22 年 6 月から光ファイバー網の敷設工事が開始されたことで、地域が情報を発信し、地域を元気にする助けになるのではないかと期待を持っているようだ。

地域づくりには若い世代の行政参画も重要となる。飯舘村では若頭連絡協議会「若連」や地元の消防団が中心となって、スポーツ活動や草刈などを行っているそうだが、行政との関わりはあまりないようだ。いかに若い世代に行政参画してもらうかが村の最大の課題となっている。

(3) 行政の支援について

では、行政側はどのような対応をしているかだが、飯舘村にはコミュニティ担当制度がある。この制度は、役場職員が各行政区に 2 名ずつ配置され、住民と情報交換していく制度であり、行政と地域をつなぐ役割を果たす。事業を起こしたり、計画を実際に活動に移したりする時に不安を抱える住民のため、担当職員が提案・助言を行ったり事務的作業を手助けしたりする。職員の勤務時間以外にも相談を持ちかけられることもあるそうだ。しかし、行政区によってはこの制度が活かしきれていない場合がある。担当職員が同地区に居住していないために声をかけにくい、職員ごとに意識・対応のしかたが異なるなどの問題点があるためだ。小宮地区のように積極的に都市部からの移住を受け入れている地区や、佐須地区のようにイベントを通して都市部と交流を持とうとする地区もある。「ばか者・よそ者を大事にしよう」という意識を持ちながら都市との交流を持つことが地域を元気にする鍵となる。また、コミュニティ担当制度を活かし、若者を巻き込みながら各行政区に適した地域づくりを行っていきたいと考えているそうである。

これらのお話を伺って、住民の方が考えている「佐須地区はまとまりのあるコミュニティである」という地区の魅力は行政側の考えと一致していた。また、住民の方々が認識している少子高齢化や後継者不足などの問題点も行政側の考えと同じようだった。そのため、住民と行政の取り組むべき対策は一致する。対策に取り組むに当たって、意識の共有ができてるのは、お互いに助け合いながら事を運ぶのに利点となる。こういった点から、行政と協力してまちづくりを行う体制はできていると思われる。ただし、住民と行政で解決

したいと思う課題の優先順位が異なる場合がある。コミュニティ担当制度という協力体制をより機能させていくことで、さらにスムーズな対策ができるようにする必要があるのではないだろうか。そうすることで、佐須をさらに元気な地区にしていくことができるのではないかと期待できる。

聞き取り対象者：管野永徳さん

佐須地区の特徴や課題を発見するために、住民を対象とする聞き取り調査も行った。佐須地区で長年農業を営み、地域づくりにも積極的な管野永徳さんを対象にお話をうかがった。

(1) 佐須地区の地域づくりの特徴と農業

佐須地区のまちづくりを支える主産業は農業である。管野さんによると、農協を介する販路は手数料や運賃がかさむ上に良い作物しか売ってくれないため、(余剰農作物を販売するには適さない)ので効率が悪いという。そのため、余剰農作物を加工したり、直売所で販売したりといった村民による新しい販路の開拓の努力がされているそうである。

また、都市住民にも地区の魅力を知ってもらい、都市にも消費者を増やして販路を拡大するとりくみもあると管野さんは言う。たとえば、都市住民が参加できる「までいな休日」での野菜品評会・オークションの開催や、このオークションによる売り上げを都市住民の交流のための資金として活用するなどの活動が行われている。これは、飯舘村の住民による自主的な活動の一つとして、「いいたて農の大地に生きる会」(平成 7 年結成)によってとりくまれた事例である。この会が主体となり、飯舘村の生産者と都市の消費者との交流の機会として毎週土曜日、福島市住宅団地(南向台団地)で村の新鮮な野菜等を出張直売する「ばんかた農市」(平成 16 年度で事業終了)が開催された。こうした交流機会において、生産者と消費者が直接対話をする「売りコミュニケーション」が行われたと管野さんは言う。

以上のように、地区内では加工品等の農作物を利用した商品開発、直売所の活用などといった販路開拓の開拓がされている。そして、こうした生産物の消費者を地域内の住民にとどめず、都市の住民にまで対象を広げようとするなど、活発な販路拡大のとりくみが行われているようである。

(2) 佐須地区の収穫と加工

農業を基幹産業としてまちづくりを行う佐須地区であるが、どのような作物が栽培され、どのように加工されているのか。管野さんによると、地区で収穫される作物として、キャベツ、ジャガイモ、トマト、カボチャ、ニンジン、ナス、大根、白菜等々、少量多品種の野菜が栽培・収穫されているという。また、肉牛の畜農家も 3、4 件存在し、キクやリンドウ等の花卉産業も盛んであるとのことだった。これらの野菜や花は基本的に農協に出荷することになる。農作物の出荷以外の用途として、農業祭(10~11 月開催)に目玉となるジ

ジャンボカボチャを並べる。この農業祭は佐須地区における大きなイベントであり、地区内住民の他にも毎年数名の学生も参加しに来るという。役目を終えたジャンボカボチャは肥料として使用されるという。

農作物を加工して販売される商品の例として、自家製味噌を使った“みそ漬け”は管野さん宅を含め、各家庭で作られているそうである。女性加工グループが季節ごとに旬の野菜や昆布等のみそ漬けにし、商品化していると管野さんは言う。このみそ漬けを使用したおにぎり、梅干し、凍み豆腐、凍み餅、キムチ等を「まごころ」という直売所にて販売している。このように、地区の住民が慣れ親しんだ家庭料理が商品化されている。

(3) 佐須地区の抱える課題について

佐須地区の抱える主な課題は、農業の担い手不足であるという。農業はお金にならないという理由等から地区の次世代の担い手たちは村から出て行き、戻ってこないケースが多い（跡継ぎのいる家は2〜3件）と管野さんは言う。管野さん宅でも、同様に跡継ぎがないという問題を抱えているそうである。また、新たに国道の整備が行われることで、交通の利便性が高くなる。中山間地域である飯舘村へのアクセスが良くなるというメリットが考えられるが、管野さんによれば月舘や川俣に出ていく人が増加するリスクを高めるとのことであった。

また、中山間地域は地理的条件が不利であるため機械の導入が困難であり、作物の大量生産は望めない、事業化できるような観光資源もない、耕作放棄地の利活用、といった課題を管野さんは指摘する。こうした課題の解決のために、農業を下支えする担い手が減少することは避けなければならない。存続が危ういこれからの農業をどう継続していくかが課題となる。

しかし、担い手となり得る40代働き盛りの夫婦も出稼ぎに行くため、地区を離れてしまうそうである。そのため、フィリピンや韓国へ赴いてのパートナー探しといったとりくみが行われているとのことである。配偶者が見つかった村民もいるが、国籍の違いからか、村の住民と交流は少ないという。

(4) 村民の期待

上記課題から、新規就農者の誘致に期待が高まる。飯舘村では新規就農者向けの窓口の整備や支援、グリーン・ツーリズム等の交流機会を通して、農業の担い手の増加と継続を目指している。管野さんによると、佐須地区でも退職後飯舘村に移住してきた新規就農者を受け入れているという。その方は現在、草木染めによる染織品の販売業をしているそうである。村民は新規就農者に対して開放的であり、農業指導を通じて交流を深めているという。

3.3 現地踏査 - あるもの探し -

現地調査では地域のさらなる魅力を発見しようと、『あるもの探し』を行った。街なかマルシェで佐須地区をPRするため、私たちも佐須地区を知り、魅力を見つけることが必要だったからである。また、住民の方たちが気づいていない魅力を見つけないという思いもあった。

今回特に印象深かったものは、絶景の星空であった。までいな休日実行委員会の集会で住民の方からお話を伺ったときに出た意見であった。「ここでは星が近い」とおっしゃっていたが、当日も素晴らしい星を見ることが出来た。今回のまでいな休日のプログラムに取り入れられることはなかったが、地域の資源として地域づくりに活かしていけるのではないかと思った。

2日目は、佐須小学校、山津見神社を歩いて回った。学校は統合され、廃校となっていた。しかし、現在は地区の集会所として生まれ変わっており、暗い雰囲気はあまり感じられなかった。校庭もきれいに整備されていて、私たちが訪れた時は草刈りをしているようだった。山津見神社は、狛犬の代わりに狼が祭られている珍しい神社である。ひっそりとしていたが厳かな空気があった。

また、直売所をたずねて佐須地区の生産者・販売物の状況を調査した。直売所では、佐須地区の生産者の名前を見ることができなかった。しかし、ある直売所で佐須地区の生産者の方に直接お会いすることができた。その方も、佐須地区の農産物を見かけることは少ないとおっしゃっていた。佐須地区では兼業農家の方が多く、直売所に出荷する時間がないなどの背景があるのではとのことだった。私たちは、佐須地区の農産物を売り出しながら、さらに地区をPRする方法はないだろうかと考えていた。今回の調査を通して、直売所などでの販売はその一つの方法として見直してほしいと思った。

※私たちが自分たちの耳で聞き、目で見て、歩いて得た情報・地域の魅力は、マップとしてかたちにし、街なかマルシェにて配布した。

4 まちなかマルシェへの参加とその活動記録

4.1 調査結果の分析

これまでの調査から佐須地区の地域課題を以下のように整理した。

佐須地区の地域課題

- ・農業での安定した十分な所得の確保が困難なこと
- ・それと関連した農業の後継者問題（若者の流出）
- ・少子高齢化
- ・インターネット等による地域情報の発信手段が整っていないこと
- ・道路整備の遅れ

しかしこうした課題がある一方で、までいな休日や加工グループの加工品の販売、気まぐれ茶屋の開業等の集落活性化に向けた様々なとりくみが行われていることも事実であった。そしてこれらの活動は、地域の風土、歴史、文化、景観等を資源として行われていることを改めて認識した。

以上の現状をふまえ、私たちCプロジェクト当初の目的であった『食』を通じた『都市と農村の交流』を都市という場で行う」という企画では、以下の三つの目的を持たせた。

「『食』を通じた『都市と農村の交流』を都市という場で行う」目的

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">① 須地区のPR（歴史・自然・文化・農産物）② までいな休日のPR、参加の呼びかけ② 須地区の住民の方に都市の住民の食のニーズを直接感じ取ってもらう③ 大Cプロジェクトが地域づくりに取り組んでいることを知ってもらう |
|--|

①、②については今回の重要な目的である。近年、飯舘村自体は知名度が上がっているが、それが地区単位となった時はまた別の話である。地域の方々がイベントで地域及びまでいな休日のPRをすることについては快く賛成していただいたこともあり、今回のイベントでは、佐須地区とまでいな休日のPRを大きな目的として定めた。

次に③については、イベント開催・参加する際に、出店する他の地域が商品売るためにどのような販売の工夫をしているのか、また福島市内の住民が農村地域のどのような点に魅力を感じているのかについて考えるきっかけとすることが具体的な目的である。佐須地区の地域の方々は、佐須地区には都市の人々を惹きつける魅力がないと認識している傾向が強かったが、それはあくまで自分たちが感じていることに過ぎない。イベントに参加して、都市の不特定多数の人との会話や会場の雰囲気を通じて、佐須地区の良さや誇れることについて改めて考えるきっかけとなることを目的とした。また、都市部での都市と農村の交流をきっかけとして、最終的に都市への販路拡大に繋がることがあればなお良い。

最後に④についてだが、これも他の目的と同じくらい重要な目的である。都市と農村の交流を目的としたイベントを開催する、あるいは参加すること自体に地域づくりへの働きかけに一定の効果をもたらすのではないかと考えた。具体的には、多くの地域の方が参加できなくても、イベント開催・出店をしたということを地域の方々に知ってもらうことにより、までいな休日等のとりくみで高まりつつある地域づくりの気運を後押しできるのではないかということである。そして、この目的には、地域づくりの気運が各地域課題へのとりくみに繋がってほしいという当プロジェクトの想いがこめられている。

しかし、こうした当プロジェクトの企画に対しては課題があった。2章でも述べたが、までいな休日実行委員会での話し合いでは、多くの方が販売となるとリスクが高いという認識が強く、イベント開催・参加について慎重な対応を迫られた。特に、今年为天候の関係で農作物の収穫がイベントに間に合うかという事態がさらにイベント実施へのリスクを

高めさせていた。「まちなかマルシェ」というイベントは、そのような中で私Cプロジェクトの耳に飛び込んできたものである。

4.2 まちなかマルシェの概説

(1) 「まちなかマルシェ」とは

まちなかマルシェは福島大学経済経営学類の小山ゼミナールの学生が設立した「福大まちづくり株式会社（通称：マルシェ・F）」が主催している。マルシェ・Fは6次産業化を推進し、県内各地域の特徴を活かした商品の加工・販売をするための取り組みを支援することで地域活性化を図ることを目的としている。まちなかマルシェはこの会社の主要な事業の一つである。まちなかマルシェは、福島県内の直売所や、地元農産物を原料に加工・商品化している取り組みを集めてマルシェ（朝市）という形式で福島駅近くの駅前広場で特徴的な物産展を開催してきた。マルシェ・ジャポンとして2009年から当事業を始め、現在までに4回のマルシェを開催している。私たちが参加した2010年10月10、11日に開催されたマルシェは4回目の取組みにあたる。

(2) まちなかマルシェの特徴

－「地消地産から地消地産へ」・「福島 style の提案」・「しゃべる農作物」－

まちなかマルシェが一般的な物産展と異なる点は、福島県内の出展者に限定し、「地消地産」により消費者へ「福島 style」というライフスタイルを提案することにある。「地消地産」という考え方は地域産業の活性化のために全国で取り組まれている「地産地消」の効果と現状に対する問題意識から提唱したものだという。地域で生産されるものをその地域で消費することで地域産業の活性化を図るという地産地消では、たとえ品質の高い農産物を市場に出しても消費者のニーズに合致していなければその商品は売れない。つまり、農家は消費者の「食」の需要に対して受動的である。また、地産地消では、地元農家は従来と変わらない程度の所得しか得られていないという問題を抱えていた。

そこで福大まちづくり株式会社が提案する地消地産という概念の特徴は、福島の商品の生産品目の多様性を活かし、地域消費者のニーズに合わせるだけでなく（マーケット・イン）、農家自らが地域の「食」生活自体を作り上げることからライフスタイルを提案していく（クリエイティブ・アウト）ことにある。この試みは、福島が県内で果物や野菜、米、そして水産業も生産できるという食の生産品目の多様性を持つ福島の特性に着目して、「食生活」をトータルに提案するものである。その提案を地域消費者に受け入れて貰うためには消費者の「食」に対する意識を変えていく必要があるが、それを商品に付加価値を付けることで実現しようという狙いがある。故に、商品に地域消費者の心を動かす付加価値を作り上げることが重要になる。この付加価値こそが、食からライフスタイルを考えさせる要素となるというのだ。このように、まちなかマルシェとは、福島の特性を活かした独自の試みであるといえる。

そのために、マルシェでは「しゃべる農作物」というコンセプトで生産者と消費者の対話を大切にしている。それは、生産者が商品をどのように生産し、そこにどのような思いが込められているのかという情報を農産物や生産者の「ストーリー」として商品の付加価値に変え、消費者へ伝えることを目的としている。これは、食の安全や無・低農薬ということに関心が集まる今日、生産者から直接商品の情報を聞くことが消費者の欲求を満たすという考え方に基づいている。また、ただ単にスーパーマーケットでもわかるような情報を提供するだけではなく、商品を使った旬の調理法や、商品がどのような環境で栽培されているのか、また農家の苦労したこと等の消費者が普段入手することのない商品情報を提供することを重視している。したがって、マルシェでは出展の際に出店者と消費者が対話できるスペースを設けることを出店者へ指示している。

また、このようなイベントのコンセプトが共有されていれば、農商工を経由せず地元農家が主体となり出展することが期待される為、多くの利益が地元産業に還元されるというメリットがあるという。以上のように、マルシェは一般的な物産展と異なり、福島県内の地元産業の活性化を目的として、地域産業の担い手の主体性が求められる物産展である。

4.3 佐須地区とのまちなかマルシェ出店に向けた話し合い

私たちプロジェクトはマルシェを地域づくりの一つのきっかけとして、あるいは農産物の販路拡大の可能性について考えるきっかけを作りたいと考え佐須地区に提案した。肝心の出展する際の商品については、各世帯の余剰作物を収集し販売できないかと意見をぶつけてみた。佐須地区では小規模な畑で農業を営んでいる世帯が多いため、JAに販売するほど多くの量の農産物を生産していないがその全てを自宅では消費しきれていない現状がある。そこで、当プロジェクトは各世帯の余剰作物を有効活用できないかと考えた。

地域住民の方々との話し合いでは、自分たちの野菜が売れるのかという不安の声が聞かれたのも事実であった。したがって、まずは都市に住む消費者がどんな商品を求めているのかといった実態把握を兼ねた交流の場として利用してみても提案し、さらにこの機会が佐須地区とまでいな休日のPRの場としても活用するという事で、イベントの出展の承諾を得た。マルシェには地域の方々に参加していただきたかったため、商品の提供だけではなく、マルシェでの販売は地区の方と共に行うことに決まった。マルシェでの商品の提供とマルシェの参加のご協力の広報は、佐須地区の区長さんをお願いし、私たちが作成したチラシを地区全体に配布していただいた（別紙資料ー1）。

4.4 出展の準備ー佐須地区住民の方との野菜の運搬と芋煮の準備ー

(1) 野菜・加工品の収集と運搬

街なかマルシェの前日に当たる平成22年10月9日に、佐須地区の住民の方々から当日に出す野菜や加工品を受け取り、福島市内へと運ぶ作業をおこなった。

私たちが受け取り場所である佐須公民館に着いたときには、早朝にもかかわらず、すで

に多くの野菜や加工品が運ばれてきていた。その後も、多くの住民の方に品物を持ってきていただき、その特徴について直接話を聞くこともできた。特に、「とっておき」という品種のカボチャを提供してくださった住民の方が、「煮崩れしにくくて、ホクホクしておいしいよ。」と力説されていたのが印象に残った。しかし、私たちの到着時にはすでに多く農産物が運ばれていたため、品物の詳細や特徴について住民の方々に直接伺う機会があまり取れなくなってしまったことは、今回の反省点である。事前に、提供する品物の種類や特徴を書くカードを住民の方々に渡していたので、そこからも品物の特徴を把握することはできたが、具体的に書かれていないものもあったので、やはり住民の方々に直接聞くことが大事であったと思う。

芋煮の下準備を終えたあと、集まった品物を福島市内へと運搬した。夏の運搬には、佐須地区の区長さんにも手伝っていただいた。

集まった品物の種類等については、表４－１のとおりである。17名の地区の方から提供していただくことができた。野菜22種、加工品15種、生花4種、と多くの品種が集まり、人気ですぐに売り切れてしまった商品を急ぎよ取り寄せてもらった商品も含め、総数は644個にもなった。2日間の合計売上は89,175円となった。

表４－１： 提供者ごとの品目・個数と、提供者数・当日の売上合計について

提供者	商品名	出品個数	提供者	商品名	出品個数
Aさん	じゃがいも	28	Lさん	梅干し	10
	大根	10		甘梅	10
	赤かぶ	8		茗荷梅酢漬け	8
	ごぼう	5	Mさん	きゅうり	3
	人参	5		白菜	3
	煮豆	10		じゃがいも	2
Bさん	かぼちゃ	5		かぼちゃ	2
Cさん	大根	20	Nさん	くり	3
Dさん	さつまいも	7		かいがら豆	2
	大根	10		パンダ豆	2
	そば粉	10		かぼちゃ	2
	ひまわり	※	Oさん	おこわ	50
Eさん	しいたけ	4		おにぎり	50
	ひらたけ	2		凍み餅	13
	なめこ	1		梅干し	18
Fさん	じゃがいも	20		甘梅	20
Gさん	はたけしめじ	2		きゅうり味噌漬け	10

Hさん	枝豆(青ばた)	10		ふきがし	20
	切り花(菊)	11		芋煮汁	71
Iさん	ストック(花)	36	Pさん	いんげん	10
Jさん	味噌づけ	10		きゅうり	7
	はやとうり	10	Qさん	りんどう	30
Kさん	にんにく	20			
	南蛮味噌	10			
	味噌(1 kg)	10			
	味噌(500g)	5			
	キムチ(大)	18			
	キムチ(小)	5			
	とっておき (かぼちゃ)	6			
商品提供者:計 17 人／売上金合計:89,175 円					

※…Dさんの「ひまわり」は、当日品物を買ってくれた方にサービスしたため、個数を把握していない。

(2) 出店の様子

福大Cプロジェクトは、2010年10月10、11日の両日に出店した。出品する商品については、事前に佐須地区の住民に出店の趣旨を伝え、野菜や加工品等の提供に協力するよう依頼していた。そして、10月8日までに地区で取りまとめ、前日に福島市まで運搬した。集まった野菜は、白菜・かぼちゃ・きゅうり、ジャガイモ、大根等多岐にわたった。

前日までは雨模様の天気だったものの、当日は快晴に恵まれた。1日目は飯舘村の大きな行事の一つである村民運動会が行われていたため参加のご協力は控えた。しかし、それにもかかわらず佐須地区の区長さんと地域の農家の方1人がリンドウをはじめとする花と人目を引く程大きいジャンボカボチャを軽トラックに積んで応援に来てくださった。接客・販売は学生が中心に行ったが、商品を見て立ち止まる客に対して、佐須地域の方が商品を説明することもあった。写真2-1は出店の様子である。



写真2-1 出店の様子



写真2-2 商品を見定める人々

訪れた人は、30代～50代の主婦が中心であった。手に取るものは大根や白菜、ジャガイモといった、家庭で調理をするものが中心であった。特に、大根はその日に持ってきたものがお昼前には完売した。

野菜を購入した人に対しては、飯舘村を紹介するパンフレット（いつきたっていいて）、佐須地区を紹介するチラシを配布した（別紙資料－2、3）。これには、今回買った野菜をきっかけに飯舘村や佐須地区に興味を持ったら、実際に足を運んで欲しいと考えたためである。また、佐須地区がどういったところであることを周知するために、店の前や周りに、佐須地区の地図や名所を撮影した写真などを掲載した。

訪れた人からは、「野菜は新鮮なのがいい」「形が悪くても低農薬なのがいい」などといった声が聞こえた。ここから、消費者の産地直送や低農薬への期待の高さが見てとれた。近年、直売所に訪れる人が増えているのもこうした消費者の食への関心の高まりが影響しているといえる。

二日目には、佐須地区から農家の方1人がご協力してくださった。また、気まぐれ茶屋のちえこさんがいらして芋煮を作ってくださった。この芋煮は、一杯250円で販売したが、大鍋二つにいっぱいだったものが、マルシェが終了する14:00前には完売してしまうほど好評だった。

この日は、佐須地区の農家の方と消費者との交流が盛んに行われた。消費者からは、栽培方法や美味しい調理法に関する質問が多かった。それに対して、丁寧に説明をしたりまた、自分から消費者に野菜や加工品の自慢を語りかけたりする農家の方の姿を見ることができた。また、それに対して都市住民から驚きや関心といった反応を得ることで自信に繋がったようであった。二日目も大好評で、追加で持ち込んだ野菜や花もほぼ完売した。



写真 2-3、2-4、2-5 二日目のイベントの活動の様子

4.5 学生の出展での取り組みの工夫と現場での学び

この節では、学生がマルシェの活動時に工夫したことや気付いたことについてまとめた。

(1) 「飯舘村」ではなく「飯舘村佐須地区」をPRする！

- ・会場全体の宣伝を担当した学生

故に、会場内の宣伝では、『佐須地区』という言葉を多用した。会場入り口のビラ配りや私たちの店付近で広報・宣伝をしていたが、来場者の方は『飯舘村のサス地区？そういうところもあるんだ～』という反応を示す傾向が強いことがわかった。しかし、だか

からこそ今回のマルシェで『飯舘村佐須地区』のPRをすることの意義を噛み締めながら当日活動した。

- ・ブースでの販売・接客を担当した学生

お客さんと話すことや親しみを感じてもらうことを重視して、できるだけブースの前に出ているようにした。マルシェ全体も開放的な雰囲気だったし、そうした態度で佐須の温かさを表せたらいいと思った。売り上げにはつながらなくても、話したお客さんの頭には「佐須」という言葉を残せたと思う。他のお店を積極的に見て回り、センスの良いディスプレイや美味しそうな見せ方等に注目した。あまり工夫していなくても一巡するお客さんは見てくれると思うが、主婦層が多かったことを考えると、女性うけしそうなディスプレイをするとよりよかった。

- ・試食販売を担当した学生

「飯舘村の佐須地区」でつくられたことを最初に伝え、なるべく地区の名前を覚えてもらえるようにした。お客さんが佐須地区に興味を持った様子であればさらに情報を提供するようにし、商品が販売されている場所へ案内した。

また、出展に協力して頂いている佐須地区の住民の方に近いところで試食を行うと、お客さんと地元住民との会話が行きやすいということに気がついた。

試食提供の際、偶然にも佐須地区出身の高齢の女性が来た。その方はしばらく地元に戻っておらず、凍み餅を懐かしいと言って食べていた。その他の商品にも興味を持ってくれたようで、しばらく商品を見ていつてくれた。

- ・店頭販売を担当した学生

佐須地区について書いたボードをお客さんが見ているときに、近くに行って佐須地区の魅力を説明したり、販売のときにも、農産物についての情報とともに佐須地区がどんな場所なのかを伝えるようにした。

マルシェの中で得られたことは、消費者は農産物について多くの情報を欲しがっているということである。その点、農産物についての情報を、事前に農家の方からもっと詳しく聞いておくべきであったと思った。

また、佐須地区出身の若い女性がいらっしやって、しばらく帰っていないから懐かしいと言ってくださった。農村から若い人が離れている現状を考えると、故郷のことを思い出す良い機会になったのではないかなと思う。

- ・芋煮やおにぎりなどの販売を担当した学生

初めての出店ということもあり販売予測も立てられず、限定50食ということで挑戦した。芋煮やおにぎりなど飲食商品は2日目に販売したのだが、初日が寒く、2日目が暑い

という天候になってしまったため、温かい芋煮は初日に提供できればよかったと思う。

休憩スペースで芋煮の出張販売を試みたところ徐々に注文が増え、「ここの商品（芋煮）が一番うまい！」、「おこわがとてもおいしかったからお汁もちょうだい。」とお客さんから声をかけてくれることが何よりうれしかった。販売を通して生まれる会話から、佐須地区の風土や私たち取り組み、お客さんの思い出話など様々な話をする事ができた。売り手と買い手の心の距離がぐっと縮まる場ということを実感しただけに、もっと多くの佐須地区の方に参加していただけるように活動すべきだと反省した。

(2) 地域づくりや地域ビジネスに取り組む主体の交流の場としてのマルシェ

- ・会場内の宣伝を担当した学生

「また、マルシェに参加したことの意義はそれだけではない。活動中に、飯舘村の別の地区で農場経営を検討している方が私たちのブースに来て活動に興味を示してくれたのだ。次回のマルシェやその他のイベントが今後あれば、何か一緒に協力できることないかという話しをし、活動の広がりの可能性を感じたできごとであった。また相手の事業の宣伝チラシを受け取り福島大学でも広報をお願いされた。このように、一つの地域で新しいことを始めようとしている主体を発見・交流する場としてもこのイベントの意義があると感じた。」

4.6 成果と課題

二日間の活動をとおして、消費者の食への意識の強さを感じた。「産地直送」「朝採り野菜」「低農薬」といったキーワードが来場者との会話の中から、またはイベント会場全体から盛んに聞かれた。多少価格が高くても、こうした安心・安全な食品を求める都市住民がいるということが改めてわかった。そのなかで、佐須地区で栽培している野菜はどれも低農薬であるために大変好評であった。

また、マルシェでは農家の方自身が宣伝・販売することにより、その野菜が「どのように作られているか」「どのように調理すれば美味しいか」といったスーパーなどでは知らない情報を伝えることができた。この顔の見える関係からの宣伝・販売により、消費者は食の安全を確認できるというメリットがある。また、農家の側も自分たちが丹精を込めて栽培した農産物を、どういった人が興味を示し、購入していくのかを知ることで、販売意欲の向上と新たなマーケティングの考案に繋がる。また、普段は交わることのない都市と農村に住む人々の交流は両者にとって新鮮な刺激となったのではないだろうか。また、気まぐれ茶屋を営む千栄子さん特製のキムチやおこわのおにぎりといった飯舘村でしか購入できない商品を販売することで、飯舘村の特色を多くの人に知ってもらうことができたと思う。また、それを通じて飯舘村のファンができ、今回配布したパンフレットやチラシを持参して飯舘村まで足を運ぶきっかけとなればいいと思う。

そして、今回のマルシェに参加し、好評をもらい多くの野菜を販売したという実績は佐

須地区の方々にとって少しでも今後の取り組みを考える材料となったのではないかな。実際、イベント後に次のマルシェにも参加させてほしいという佐須地区の方からの声を聞くことができた。こうした試みが今後の佐須地区で広がりを持ち、都市への販路拡大や地域づくりが盛り上がればとメンバー一同感じている。

5 までいな休日 in 佐須

私たちはイベント参加者としてではなく主催者側スタッフとして、一日目の民泊と二日目の農業体験を除く全日程の手伝いを行なった。それらの活動に加えて、二日目の農業祭ではイベント会場である体育館前でマルシェの報告を行なった。具体的には、イベント時の写真を黒板に貼り付けてまでいな休日に参加している全ての方々が閲覧可能なようにし、その詳細をお話した。このように、イベント参加者も含め、多くの地域の方々へ当プロジェクトの活動を理解してもらえるように取り組んだ。この章では、佐須地区のまでいな休日の様子と私たちの報告について報告する。

5.1 佐須地区のまでいな休日の様子と魅力

2010 年で 2 回目となる佐須地区のまでいな休日の参加者は、男性 7 名、女性 11 名であった。イベント内容については、去年とほぼ同様のプログラム構成で行なわれたが、今回は最終日に「あおぞら市」を開き、オークションでは購入できないエゴマ油やお米などお土産を販売するブースを設置することを試みた。そのスケジュールは以下に示される（表 5-1）。

表 5-1：までいな休日のプログラム（2010 年 11 月 6 日、7 日）

一日目	行事	詳細・備考
12：30～	入村式（昼食）	村側の挨拶／参加者自己紹介／地元料理でのもてなし
13：30～	山津見神社周辺散策・虎捕り山登山（選択制）	写真撮影／約 800m の高さの山／きのこ狩り
15：00～	体験イベント：虎捕太鼓／そば打ち	達人の極意の披露
17：00～	こだわりの里交流会	郷土料理でのもてなし
20：00～	民泊家庭に移動・就寝	

二日目	行事	詳細・備考
6：00～	農業体験	品評会出品農産物の収穫
7：00～	朝食	民泊先にて
8：00～	農業祭・収穫感謝祭	品評会審査体験／交流会の食事準備体験（餅つき）／菊鑑賞体験等

12：00～	昼食（地元料理）	虎捕太鼓披露
13：00～	農産物オークション	
14：00～	退付式	あおぞら市

までいな休日の最大の魅力は、地域住民がイベントの企画・実施・参加を行なうところにある。さらにこの魅力は二つの点にわけることができる。第一の点は、地域住民がこれらを実施・企画の両方を行うことにより、参加者が地域の文化や生活のありのままに近いものを感じられることである。このことは、市場で民間が提供するいわゆる田舎体験ツアーと決定的に異なるところである。実際に参加者からは「普通のツアーと違って手作りの感じがいい」という声が多く聞かれた。例えば、虎捕り山の登山の企画では、山を登るのが得意な地域住民が山道の案内をするため、その山の生態系のことやその案内人自身の虎捕り山に関連する思い出話を話してくれた（写真 5-1）。また、きのこの達人と呼ばれる人は虎捕り山で採れるきのこの種類の説明（写真 5-2）や、それらが採れる場所を登山しながら教えていて、きのこ狩りを楽しむ参加者も多かった。このように地域住民との会話等のやりとりで地域のことをより深く理解できる、言替えれば、生活の場としての地域の姿を把握することができるのである。

写真 5-1： 山の木々の説明



写真 5-2： きのこの達人の説明



第二の点は、実は、こうしたプログラム自体が参加者と地域住民の交流する場となっていることである。このことは、までいな休日実行委員会の方が「までいな休日に参加者する全員が主役」と語っていたことから指摘できる。上述した例だけでなく全てのプログラムで地域住民がイベント実行者となり、参加者との会話や何気ないやりとりをとおして交流を図っている。このことは、面と向かって交流する場面の少ない婦人会の方々も、手作りの食事を作り提供することを通じて、実は参加者と交流しているのである（写真 5-3）。子どもたちも元気いっぱいハロウィンアイテムづくりや参加者と遊ぶことでこのイベントを盛り上げている（写真 5-4）。

写真 5-3：調理場のお母さんたち



写真 5-4：ハロウィンカボチャづくり



一日目のこだわりの里交流会において何人かの参加者が自己紹介の場で「いろいろ体験できて、ご飯も手作りで全部おいしくて、今晚寝られないほど興奮しています」と話していたことがそのことを証明しているように思える（写真 5-5）。その他においても、そばうち体験や虎捕り太鼓の体験等は、参加者の目を輝かせていた。（写真 5-6）。

写真 5-5：交流会



写真 5-6：大盛況の体験コーナー



以上のように、までいな休日の特徴は地域住民が作り上げ参加者となることによって、一般的な旅行とは異なる交流イベントとなっている。このようなまでいな休日を、佐須地区や飯舘村はグリーン・ツーリズムとしても捉えている。今回の調査で得た知見としては、参加者は地域住民が企画し、交流もできる「手作り」のプログラムを望んでいた点である。この分析が正しければ、までいな休日において、ひいてはグリーン・ツーリズムについても地域住民によるイベントの企画、そして参加は非常に重要な要素となる。そして、その際に当然必要となるのは住民の主体性である。住民がイベントを中心的に企画・運営したい、あるいは一般の地域住民として関わりたいといった主体性をより多くの住民まで浸透させることがイベント成功の大事な要素となるだろう。

その点においてまでいな休日は、農業祭という地域独自の催し事をまでいな休日の一つのプログラムに組み込んでいる点が住民のイベントへの参加を促している。この点は評価すべき点の一つであろう。今後も、までいな休日のようなとりくみを継続させていくこと

が、住民のイベントへの主体性を高める努力をすることが重要である。そして、こうしたとりくみの蓄積が、地域づくりへと結びつくことを願ってやまない。

5.2 まちなかマルシェの報告の場としてのまでいな休日

当プロジェクトは、当節の冒頭で述べたように、までいな休日の進行の手伝いをするのみではなく農業祭のときにマルシェの活動の報告を簡単に行なった。農業祭の会場となる体育館と公民館の間の5～6メートル四方のスペースの一角を利用して、黒板にイベントの様子を撮った写真を掲示し、までいな休日の参加者や地域住民の方々にわかるようなかたちでその活動を報告した（写真5-7）。

この活動を通して、多くの地域住民の方と話す機会ができ、そのやりとりから「いっぱい売れたんだってね、お疲れ様」という声をいただいた。また、報告時だけではなく、他のプログラムのときでも「野菜持ってってくれたのあなたたちだったの、ありがとね」と話しかけてくださる地域住民の方も多かった。このようなやりとりは、メンバー同うれしいことであり、当プロジェクトの一つの成果だと感じている。地域の多くの方に当プロジェクトの存在を認識してもらえたことは今後の活動に対しても理解を得やすくなると考えられる。また、それよりも重要なのは、参加者だけではなく私たちメンバーも地域住民と交流を図りそれを深めていたことに気付いた点である。調査という点に着目し過ぎると、この点を見失う傾向にある。会話というのは相互の信頼関係に基づいてその内容がある程度規定される部分がある。今後はこれまで以上に地域住民との交流を大事にし、様々な会話や話し合いをする中で、地域づくりの新たなアイディアや住民の方々の想いを汲み取り、新たな活動へと結びつけていきたい。

写真5-7 までいな休日でのまちなかマルシェの活動の報告の様子



6 総括―活動を通して―

今回、私たちは飯舘村佐須地区の皆様と複数の話し合いや合宿、そしてまちなかマルシェへの出店、までいな休日の参加と、共に活動をしてきた。当初、私たちは福島市内での農家レストランを計画したが、それは本当に実現可能であるか、誰がどのような役割を担うか、佐須地区の皆さんや大学教授のご意見をいただきながら、私たちの力で一体何ができるのか真剣に考えてきた軌跡がこの1年であったと思う。

そのなかで私たちが学んだことは、中山間地域で暮らす人々の本当の声と、「協同、助け合い」の心だったといえる。当初、何ができるか地区の方々との会議が数カ月間続いたが、そのなかでは、農業、直売所の厳しい実態、少子高齢化の危機感、など沈んだ話と悲観的な意見が印象的であった。しかし、だからこそ地域を少しでも明るく元気にしたいと思う気持ちが強いことも、交流を通して強く感じた。例えば、マルシェで販売する野菜や加工品の仕入れでは、会議の様子や悲観的な意見があったこともあり、あまり集まらない思いながら地区に向かったが、車に積みきれないほどの野菜や加工品、生花が集まっていた。またそれらを受け取る時には「がんばってね。」「地域のためにありがとう。」などの言葉をかけてくださった。さらに、までいな休日で地域の方々にマルシェの活動を発表したときには、多くの感謝の言葉と笑顔をいただいた。「今までいろんな学生がやってきたけれど、地区のために何かしてくれた学生は初めてだ。」という言葉には、地域が求めているものが明確にあらわれている。地域を何とかしたい、そのためにできることを少しずつ実践していくパートナーが欲しいということである。そういった意味でも、交流と活動継続性が今後の課題であるといえる。

そのためのヒントも地区住民から頂いたと感じている。「私たちはバカだから、何もできない。だけどお互いのできることを合わせれば何でもできる。」この言葉は、芋煮汁の調理実習と仕込みの時に聞いたものである。氣まぐれ茶屋を営む、千栄子さんのご指導のもと行なったのだが、偶然にお店に遊びに来たおばあちゃんや、話を聞き応援に駆け付けてきてくれた方々との交流のなかで教えていただいた地域の実態であった。またこれらは私たち学生の地域に学ぶ姿勢そのものともいえよう。

「都市と農村の交流」を都市で実践する意義もはっきり見えたといえよう。今回私たちは、飯舘村から近い福島市でその場を作り出したわけだが、そこには村出身の方々、仕事でかかわりがある方など、予想よりも何かしらの関わりを持つ方々が多くいることが、地区製品の販売を通して生まれる会話から判明した。自分が生まれ育った地域、訪れたことがある村が、学生たちと一緒に頑張っていていることに勇気付けられた方、幼少期によく食べた農産品から昔を懐かしむ方々など、地区の紹介や商品情報からさらに忘れかけていた個々の深層の思いを掘り起こすきっかけとなる場でもあった。都市と農村の交流は、地産地消のブーム、活性化の手段だけではない。人々の心を動かすメッセージであり、私たちが今の生活を振り返るきっかけをももたらす学び、気づきの場であった。

私たち学生一人ひとりができることなど言ってしまえば何もないに等しいであろう。しかし多くの学生や様々な立場の人たちと手を取り合えば、様々なことに挑戦することができる。そのなかで今私たちができるベストは何かが真に問われているのであろう。佐須区長はよく「佐須流でやっぺいこう。」とおっしゃっていた。まさにこのようなことなのであろう。私たちは地域づくりの実態を知ると同時に、大学生が地域づくりの支援に取り組むあり方について、まさに交流を通して学んだ。私たちができることを、多くの人々と共に悩み考え実践する。少しの前進が地域にとっても私たち学生にとっても、とても大きな一歩であるのだ。私たちはこれらを「佐須ていなぶる（Sustainable：持続可能な）」と提言したい。地域づくりとそれを支援する学生の姿勢はともにこの観念と実践が必要なのだと いえる。

おわりに

飯舘村佐須地区の皆様との交流とまちなかマルシェの挑戦は、私たちにとって中山間地域の現状を知るだけでなく、地域とは、暮らすとは一体なんだということを考えさせられる機会でもありました。過疎や農業衰退が進みゆく農山村のなかで、人それぞれ多様な悩みを抱えていることが地区の方々との会議や交流を通してひしひしと感じました。しかし、だからこそ「地区を盛り上げたい」という思いが、一層強くあることにも気づくことができました。「地域の中に学生が入って活動してくれること、地域のために実践してくれたことが今までに研究で来てくれた学生にはなかったことで、何よりうれしい」その言葉を耳にしたとき私たちの活動の意義が見えたような気がしました。理論や座学といった研究の中では学べない、現地の住民の心の声を知ることができたことが、何より私たちの活動の成果といえるでしょう。

「地区のために何か活動したい」という気持ちから私たちなりに全力を尽くしてまいりましたが、多々ご迷惑やご無礼をおかけしてしまったこともありました。しかし佐須地区の皆様、飯舘村の皆様、飯舘村役場の皆様、福島県庁の皆様、株式会社マルシェFの皆様、その他多くの皆様の手厚いご協力とご指導により無事に今年の活動を終えることができました。学生メンバー一同、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。少しばかりではありますが、佐須地域の笑顔と活に貢献することができたことと思います。私たち一同、今後とも飯舘村、佐須地区のつながりを大事にし、これからも共に地域の活動に取り組んでいきたいと思いまので、今後とも一緒に地域を盛り上げていきましょう。



佐須地区のみなさん！
ありがとう！！

平成 22 年（2010）年度 大学生の力を活用した集落活性化調査委託事業 報告書
福大C（までい）プロジェクト